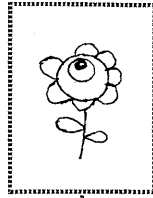


# 五月を中心に現場における子どもの理解と指導



## ○五月に思うこと

この月の保育はどのようにあったらよいであろうかと考えるために、思考の焦点を五月という言葉に合わせてみた。五月！何というさわやかな感覚をもった言葉であろうか。美しく晴れた中空に、子どもの成長をよむこぶ鯉のぼりが泳いでいるさまが目映ってくる。さらに思い続けているとき、ふと、以前に好きであったブラウニングの春の朝という詩が思い出されてきた。

The Year's at the spring,

And day's at the morn;

Morning's at seven;

The hillside's dew-pearled;



The lark's on the wing;

The snail's on the thorn;

God's in his heaven — all's right with the world;

(春の朝)

時は春

日は朝あした

朝は七時

片岡に露みちて

揚雲雀なのりいで

かたつむり枝にはい

神 そらにしろしめす

すべて世はこともなし)

春のうたけき感情が見事に語られている詩であり、よく口ずさんだものであるが、五月を思うとき、この詩のようなのどけさと、すべてこれからはじまるのだという思いと、なにかすばらしい可能性をもった時のおとずれとが感じられてくるのである。

五月の幼稚園の庭を思ってみよう。陽春の日ざしを浴びながら、木々は新緑の葉を風にそよがせ、庭の花だんには色とりどりの愛らしい花が咲ききそっている。こうした春の盛りの園庭で、新入の園児の中にも、もう大分園の生活になれて来て、友だち同士ですべり台やブランコであそんでいる子どもたちの姿が見られる。かと思ふと母の手にすぎるようなようすで教師の手にまつわりながら歩いている子どももある。さらに部屋への入口あたりには、好奇心と警戒心とのいりまじった表情でたたまっている子どもも見られるかもしれない。と、かなり大勢のグループの子どもたちが一団となつてかたまつて走つて来る。そこには、すっかり気心のしれあつた友だち同士の呼吸がある。遠慮のない言葉のやりとりがあつたり、何かあそびのルールを熱心に説明する子どももいたりする。これらはもちろん、園の生活が二年目、あるいは三年目になつた年長児のグループである。

私はこうした情景の見られる五月が大好きだ。一方ではほんの少し幼稚園になれてきたようすの子どもたちがある。他方には対

照的にゆとりがあり、我がもの顔にあそんでいる年長児の姿がある。年長児が新入園児を交えていたわりながらあそんでいるほほえましい光景もみられる。その二者の姿が対照的である程、これからの月日の歩みとともにおとずれる子どもたちの成長と教育の可能性の姿をここに見るような思いがしてくるのである。五月！この年度の第一歩はもうすべり出ししている。そろそろしつかりと地固めをしなければならぬ月である。

### ○この頃の子どもの状態をみる

つい先頃、新入の子どもたちを迎えて入園式をしたように思うのに、ふりかえてみるといつの間にかもう一か月たっている。この間、子どもたちにとっては新しい経験が多く、めずらしかったり、不安であつたりすることも多かった。まず自分の組や自分の先生を知ることから、スタートがはじまる。それから自分の持物をおく場所をいろいろとおぼえたり、級の友だちをだんだんと知つたり、園でのきまりを少しずつ知つたり、etc・etc……社会生活の第一段階である幼稚園は、新入の子どもたちにとつて、うれしいことやめずらしいことも多いけれど、他方からみればそこには集団生活におけるきまりというものが存在し、今までのように勝手気ままとはいかない面もある。それに適応していくための努力を子どもなりに一生けんめいしてきたことであろう。

教師の側からは、一日も早く子どもたちが幼稚園になじむようにとねがい、そしてその子どもの本来の姿を見つけないと努力して来た。新しい集団に入って、子どもたちひとりひとりがいさびしい思いをしないように、困ったことばつつかって立ちんぼうにならないようにとたえず気を配り、声をかけて毎日を通してきた。そして安心できるように名前を何回もよんであげたりもする。おもちゃもあそびやすいような位置に配置する。そして教師があそびを誘導していっしょにあそぶ。しかしそれでもやっとひとわりあそび出せたと思っても、この頃のアそびは長つづきせずぐにくずれてしまう。その理由はといえば、友だち同士、あるいは教師と子どもの間においてまだ緊密な心のつながりがなく、たいていは遊具自体があそびの仲だちとなっている状態で行なわれているあそびであるから、単調であり、かつまた発展性も乏しいからである。しかし教師としては、これを当然と達観しているわけにはいかない。こうした状態の子どもたちに、少しでもおもしろかった！楽しかった！という経験をさせたいと一生けんめい心をくだく。また、教師が一所のグループに気をとられていると、その間に家へ帰りたくなってしまふ子どもも出てくる。所在ない気持ちをもたせないようにいつも全ての子どもたちに気を配らなければならない。こうした生活が新入の級の子どもと教師の毎日であり、最初の一か月はいわば夢中で過ごしてしまう。

しかしここで五月に入ったのを契機として、ちょっと気持ちにゆとりをもたせて、この一か月間における子どもの成長の面にスポットを当てて見るのはどうであろうか。新入の園児たちの間にも意外と園児らしい落ち着きが現われていたり、その生活もだんだんと軌道にのりつつあることを知る場合もあるのではないだろうか。親近感も最近はぐっと伸びた。たとえば、朝部屋へ入ってくる時の子どもの表情一つでも、最初の頃の緊張の多い不安げな表情とちがって、明るくなり、親しみがこもってきたのが感じられる。あるいはあそんでいる時、「先生！」といって呼びかける子どもの声や笑顔にその成果がよみとれることもある。最初の頃はなかなか親とはなれずにいた子どもも、いつか友だちと手をたたくところまで成長していたりもする。

しかし友だちとずいぶんあそべるようになっていく子どももいる反面、最近になって急にいきかきも多くなったりしているのに気づいて驚いたりする場合もある。教師というものはいつもひたむきにうちこむ熱意もさることながら、多少はなれてみることをすると案外視野が広くなったり、客観性のある見方ができたりして、ここにまた指導のポイントを見つけたりする場合もある。昨日は今日につながり、四月は五月に続いていくけれど、見方を変えてみると子どもの成長も日に新たななりという思いもひとしおであったりもする。

## ○五月の指導目標について

さて、私も教師がある月の保育を考えると、このような子ども状態を十分に留意しながらその月の指導目標をたてていくわけであるが、五月の場合次のような考え方をしてみた。

指導目標というものは子どもの経験や活動に沿って種々考えられるものである。新入園児を対象とした場合、五月という月は友だちあそびが少しずつ進んでいく月であるから、友だち関係の面からの指導も多くなる。あるいは遊具に関しての取扱以上の指導も大切である。あるいは園でのきまりとか、この月からはじめられるおべんどうのことについても、ずいぶん留意しなければならぬ点も多い。さらにこの月の予定をみると、子どもの日・遠足・小運動会・身体検査・母の日などと行事もかなり多くあり、それら行事への参加の仕方などからも指導上の問題は多い。

それらの中で何が最も大切であり、何を指導目標にすべきかは個人個人の考え方とか、あるいは園での方針などによって定まってくるのであるけれど、何をとりあげる場合にも、なにかんづく重要なことは何が園児の生活の基礎になるものであろうかということとをじっくりと考えてみて進むことである。そして指導目標が上すべりをしないように、しっかりと子どもたちの姿をとらえていくことが肝要である。

四月からの子どもたちは、いろいろと新しい経験をしたり、教

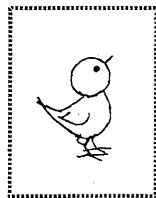
師の誘導によって集団生活に入っていくたり、生活習慣を知ったりしている。毎日の園での生活とか、遊具やあそび場などに関しても、それぞれの中に少しずつきまりというものがあることを経験からおぼえてきた。しかし、ここ一か月間のこれらの経験の先導には大抵の場合教師がおり、教師の誘導によって行なわれていた場合が多い。

今一度、子どものひとりひとりについて集団生活になじむことや、幼稚園での生活習慣を身につけていくことが、どの程度進んでいるだろうかとの際深く考えてみることも大切である。とかく、教師の指導が熱心でありすぎるとかえって目標とか計画が子どもの姿より先ばってしまうような傾向も出てくるが、それではせっかくの園の生活が子どもにとって地面に足のつかないものになってしまう場合さえ出て来る。また、いつまでも軌道にのってこない子どもがいたりすると、うっかりするとあせりをおぼえたりするが、長い目でみると園では生活はまだはじまっただばかりであり、これから二年なり、三年なり続くのである。

五月という月はこれからの未来に続く月であるから、今の状態でおお一層先をいそぐより、基礎となるものをゆるがせにはならない時期なのである。目標設定の場合にも、先へ進むより、同じ内容のものが少しでも深まり、広がりを得られるようなものでありたいと考える。

### ○子どもの成長を待つ

頭の中では五月の幼稚園はこうありたい、教師の指導はこうありたいと理想像が出てくるが、現実の姿としては、まだまだいろいろなのが原因で子どもの生活も円滑に順調にはこぼないことも多く出て来る。子ども自身の手でやってほしいと思うことでさえも、子どもがそこまで実っていなければ、現在の段階では教師が先に立ってしまったら、手助けしたりしなければならぬことも多くある。頭で考えたことが、考えたごとくに運ばないところ



### ○友だちに乱暴をするとき

友だちに乱暴をする原因を考えると種々ある。自分の気持ちを言葉で表現したいが思うようにできない時・周囲の状況が自分の思い通りにならない時・友だちや教師に自分を認めてもらいたい時・てれくさい時・友だちになりたい時・疲労した時・思いきりあそべない時・等々新しい生活のはじめにはフラストレーションが多い。そんな時、乱暴という形をとってそれが爆発する。乱暴により欲求不満を解消しようとしている子にとって、それ

になやみも出て来る。

しかし、教育の本質というものは現在のみにあるのではなく、子どもの可能性を信じ、それを豊かに成長させることであり、未来を創造していくことなのである。子どもの成長は日に日に大きい。五月の現場にあつては、教師は、あせらずじっくりと子どもの成長を待つ気持ちで保育していく心がまえをもっていることが、何より大切なのではないだろうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

福 西 百 合

を禁止する言葉は、次の乱暴を誘発させることになる。しかし乱暴させておけば危険が伴う。どの位までの乱暴を認めるかの程度の問題になろう。またどんな形でエネルギーを発散させるかにより、たのしいあそびにもなり得るであろう。

### 真の場合

五歳男児、一年保育。ひとりっ子でわがままに育てられた真は、遠くから通園しているため知っている友だちはいなかった。自分の家の近所の子たちを子分にして親分の座にいた真は、幼稚

園でもさっそく子分作りをはじめた。しかし、クラスの子たちは素直に子分になるどころか反発して逆に真を子分にしようとしかねない意気込みだった。クラスは妙な雰囲気になった。こんな時にお友だちと仲好くしようとか、乱暴はよそうとかいう忠告は効果がなさそうだった。乱暴したいエネルギーを運動により身体を使うことで発散させようとした。走らせることにした。はじめは数人の子どもたちをさせ、目的物をさわってもどつてくることをした。大声でさわぐ子どもたちを見てポツポツと仲間に入る子どもがでてきた。三グループに分け、三色のバトンを用いるようになった時には、子どもたちは汗を流していた。クタクタになり「つかれたよー！お水のんでくるよ！」と休みながら友だちが走るのを応援する頃には、リレーへの楽しみで夢中になり、乱暴する力は残っていないかったし、その必要性もなかったようである。友だちと一緒に楽しく遊べればそれで満足だったようだ。乱暴は友だちを作るための手段だったようである。

#### 進一の場合

四歳男児、入園前は両親とも勤めているために祖父母や叔母と過ごす時が多かった。家では自分のしてほしいことを皆周囲の大人たちにしてもらっていたし、大人たちの手助けによるものは自分でするよりも、また周囲の子どもたちがしているよりもよく整っている。従って自分でこのようなことをするのが非常に難しい

し、よくできないという気持ちからか、四月には進一はあまりあそびたがらなかった。何かをしたいという気持ちは五月になりより強くなったように見うけられた。やっと友だちとのとつきみあい、それを表現できるようになった。今迄のやりきれなかった気持ちを一気に発散しているかのごとく思われ、はらはらさせられるほど乱暴な行動がみられた。力一杯体当たりできるように教師も一緒に加わった。教師は適当に手加減できるが、それできない子どもにも同じように体当たりする進一は、時には乱暴すぎると感じさせられた。こんな時の相手になり方、またその後の導き方も考えておかないと友だちに乱暴をしすぎたり、教師に依存しすぎたりする結果になることにもなる。とにかく進一は、乱暴をしながら不安を解消し、友だちの中に入っていた。

#### 肇の場合

四歳男児、気に入らないことがあると、顔を真赤にして怒り、友だちをなぐったりひっかいたりする。言葉で自分の怒りを表現できる程の言語表現力はない。肇が話をしようとしても友だちが耳をかさなかったり、思っていることをたどたどしく表現するうちに友だちが話しはじめてしまったりすると怒って友だちに乱暴する。肇の乱暴は言葉であり、感情の表現である。

これは入園前、家でそのようにふるまっていたためで、やかましく禁止すると欲求不満がますますひどくなると思われたので、

そのことには直接ふれずに聲の緊張がほぐれ安定するように身近なとりつきやすい遊びに導いた。活発に走りまわって大きわざし熱中してあそび、それを十分に楽しんだ後は、友だちに受け入れられたという満足感からか乱暴はあまり見られなかった。

聲は乱暴でもあるが、どんなことも率直に行動に表現する個性のある子である。

子どもの乱暴の原因及び表われ方はそれぞれ異なるが、友だちを傷つけずに乱暴を表現できる場、入りやすい動的あそび等を通じて乱暴を発散できるような場を配慮してやる必要がある。走ったり、投げたり、押したり、たたいたりなどの身体表現が抵抗なくできる場がそれであろう。教師が子どもの欲求不満の量をへらしてやり、安定感をいだかせてやることにより、問題になる乱暴は姿を変えて、問題のない形で表現されるようになる。

### ○いつもぶらぶらしていてあそばないとき

四月は入園の喜びを日々展開する新しいことに次々と追われるようにして過ごしてしまいが、五月になると幼稚園の持つ新しさへの興味も限度に達し、あらためて個々の子がお友だちの中の自分について気をくばれるようになる。ある時にはそれは子どもも前進の一步となるが、同時に停滞または後退ともなりうるが多々ある。

教師としては、新しい計画とあふれる抱負でスタートした新学期早々こんな問題を深刻に考えすぎ、どうしたらよいかあせりを感じてしまう。しかし、この頃に出てくる問題は処置のしかたでやや快方には向かうものの、短期間には解決しないものが多いのではなからうか。問題によっては、三学期末までもかかるものもある。特に五歳になってから一年保育で入園した子にあらわれる問題は、既に子どもの中で、ある型ができて上がっているだけに長期計画で対処する必要がある。

何もしないでぼんやりとぶらぶらしているのもその一つであろう。

### 洋子の場合

四歳女児、三人兄弟の一番上。入園当初から何事にも動きが遅く消極的行動が見られた。家にいる時は朗らかに話をするが、幼稚園では、友だちや教師が話しかけても無表情のまま話をしようとしなない。クラスの子どもたちの遊びが活発になるに従い、洋子がポツンとひとりでぼんやりしているのが目立ってくる。しかし園にはきちんと休まずに来るし、とても楽しみにしているというのであった。何やかやとあそばせようと働きかけたり、あそべるような物を準備したが少しあそぶとやめてしまい傍観者の側にまわってしまう。かなり緊張している様子がみられる。

一学期の終り頃、いつも園でみる洋子と全く違った感じの洋子

を見た。家でのあそび友だちの一つ年上の女兒と夕方園にあそびに来た。顔いっぱい笑いを浮かべ、驚くほどペラペラとおしゃべりした。こんな姿もあるのだ、緊張がとければよいのだろうという不安信じて待つことにした。勿論どうすればよいのだろうかという不安はややあったが、洋子と教師の交流をスムーズにすることに努めた。他の子がいないとき洋子本来の姿を見せてから洋子は教師の質問に答えるし、どうしても話をしたい時には自分から話しかけてくるようになった。動きが遅いことも入園前家庭であまり動きまわらずに育つたためのもので、二学期には、洋子のできそうな仕事をみつければ頼み、洋子に身体を動かさせるようにした。

洋子が、かなり自由に友だちと遊べるようになったのは二学期も終り頃であり、三学期には女兒の中でもにぎやかにおしゃべりをしてあそぶほうで入園当初の洋子を想像もできないほどである。

#### 聡の場合

四歳児、三人兄弟の末子、「あそぶものないもん！」といっているがぶらぶらしていた。あそぶものはあっても家でするように兄姉や母に求める援助を教師に求めるのはちょっとでれくさいし、自分で考えてもいいけど、こんなことさしたら友だちに何とかいわれやしないかと気の小さい聡は考えていたように思われた。

さそってみても、「見てるほうがいいんだよ！」とことわられてしまう。聡は自分だけであそぶことはよくする。ひとりあそび

に夢中になってそこで十分なあそびの楽しさを味わってしまうために友だちとあそぶ力が残っていないのではなにかと思えるほど、友だちとはなかなかあそぼうとしない。兄の潔もひとりで指しゃぶりをしていたことがたびたびあった。二学期になっても聡のあそびにはむらがある。よくあそぶ時には熱中してあそびを楽しんでるが、休息のごとき時がある。ときどきのぶらぶらは年少児には必要なのであろう。休息の意味で、ぶらぶらしてぼんやりしていて積極的あそびはなくても堂々と他人のあそびを見ていられるような場をときどき作ることにしたし、その必要な子は自分からそれを求めていく。子どもたちがテレビの中に入ったつもりであそぶ時のテレビを見る人、のりものごっこ乗客のような消極的参加が子どもに休息のチャンスを与え、また同時に次のあそびへのいとぐちにもなったようである。

このようにぶらぶらしたり、ぼんやりしている場合には見ていることを楽しんでいるから・友だちの中であそぶのがてれくさいから・どのようにしてあそんでよいかわからないから、自分の好きなあそびがないから・不安から・依存から・能力不足からと原因は種々ある。あまり無理にあそばせようとすると、逆にその子を幼稚園ぎらいにしてしまうこともあるから、子どもと教師の交流に努め、ぶらぶらが解消できるチャンスをとらえるよう心がけて、長い目で見守れるようにしたい。

(茨城県下妻幼稚園)







## 星野三和子

○どうしてもお弁当を食べようとしないうとき

五月ともなりますと幼稚園の生活にも慣れ、お友だちもそろそろできてきます。普通のクラスですと、十一時過ぎになりますと、必ず一人二人は、先生の側に近寄って来て「先生おなかがいっぱい」と言い出すものです。先生もまた、普通の職業の方には想像もつかないほどにお腹がすきます。子どもたちといっしょに鬼ごっこする、歌を唱う、お話を聞かせてあげる、ましていろいろと、問題のある園児をかかえておりますと、朝から張りつめていた気持ちですが、「いただきます」の一声で、はじめて、ほっと一息つけるのです。みんなうれしそうに食べはじめるところがもし、どうしてもお弁当を食べようとしないう子どもがクラスに一人でもいたらどうでしょう。五年余りの幼稚園生活で私はそういう子どもを想像もしませんでした。

しかし昨年十月の末に一人の母親が園に訪ねてこられ、途中からですが入園させていたきたいというのです。卒園までに、あと五か月です。いろいろとお話を聞いておきますと、二年保育で

ある幼稚園に入園され、喜んで通園していましたが、お弁当が食べられない」の一事が原因で、どうしても幼稚園へ行かなくなってしまったのです。入園願書の備考欄には次のように書いてありました。

「扁とう腺肥大のため、食べることに臆病につき極めて少食です」と。とにかく三月までおあずかりすることにしましたが、私も内心不安でした。

しかし、そのお母さまが大変ご理解のある方で「食べても食べなくてもほっといて下さい。お弁当は食べなくても家へ帰って来てから何とか栄養はおぎないますから。お弁当以外のことでは幼稚園は大好きなんです」とおっしゃってました。

いよいよそのS子ちゃんがお弁当を持って登園して来ました。淡々とした気持ちをよそおって半日の保育は済みいよいよお昼になりました。S子ちゃんも不安がいっぱいだったでしょうが、私もまた心配でした。今手許にその頃の日誌のないのが残念ですが、その日と次の日はたしか何も食べずに帰ったと思います。で

も私は決して S 子ちゃんの近くへは座らず遠くから見ました。だまって前の席の子や隣の席の子の食べるのをみていたかと思うときどき、自分のお弁当の向きを変えたり、コップをいじったりしてましたが、何も食べません。それどころかお弁当のふたもあけません。

みんなが食べ終わる頃、私ははじめて側へ行つて「S 子ちゃんお弁当たべたくないの」と聞きました。こっくりしました。「そう、それだったらお家へ帰つてゆっくりたべましようね」またこっくり。そんな具合にいつもあつてなくその日のお母さまの心づくしのお弁当は、そのまま、また母親の手にもどされることになつてしまいました。

二日目も同じように何も食べず、何も飲まずに帰つて行きました。でもこの日は一人でお弁当のふたをあけて、御飯や、おかずを、つつついてました。残念ながら口へは一かけらも運ばれませんでした。

三日目はパンだったと思います。少し口へ入れましたが、大部分は持つて帰りました。

この頃だったと思います。「ほっといて下さい」といったはずのお母さんが、心配そうに「どうして食べないのでしょね」といい出しました。私は、一日目、二日目、三日目とそれぞれ結果としては同じように手をつけずに持つて帰つてますが、S 子ちゃん

んの気持ちの上で食事に対する緊張が、一日とほぐれていく様子を見てますので、安心して、毎朝、S 子ちゃんを迎えてあげました。お弁当は絶対に残さないように食べなくてははいけない。という気持ちだが、S 子ちゃんの頭からだんだんうすれていくのに正比例して、S 子ちゃんのお弁当のおのこしの量も減つていったようです。

一週間過ぎた頃はじめて、全量をきれいに食べました。S 子ちゃんを中にお母さまと私とみんな大喜びしました。

今も三十七名のクラスを担任していますが、毎日一人は必ず、「先生、このおかず辛いから残してもいいですか」とか、「おかずがなくなっちゃったからのこしていいですか」とかいって来ますが、いつも「いいですよ」というようにして来ます。もちろん毎日次のように大声で斉唱しますので、残してはいけないこと、こぼしてはいけないことを、百も承知の上でのことなのです。

園児「食前のおやくそく。食べものは大切なものです。よくかんでのこさないように、こぼさないようにいただきますしよ。お父さま、お母さま……おいしいお弁当をいただきます」先生「召し上がれ」こうして嬉しいお食事の時間を迎えます。子どもたちの気持ちになつて、無理をしないようにおらかな気持ちで、楽しい思い出となるようにこれからも努力したいと思います。